

祖父・品造の思い出



私は昭和 14 (1939) 年生まれ、祖父・品造は明治 6 (1873) 年生まれである。私が小学校 5 年生の時、昭和 25 (1950) 年 10 月 31 日に、体調を崩して僅か 13 日で亡くなってしまった。

お葬式は 11 月 1 日だった。当時は土葬の時代、父に「墓穴が掘り上がっているか、行って聞いて来い」と言われた。9 月 3 日に空戸岬に上陸した超大型のジェーン台風で、お墓への道が大幅に崩れていた。仕方なく、山の中を近道して行った。近所の徳太郎さんと格一さんが休んでいた。徳太郎さんが、

「今、掘り上がったところじゃ。健ちゃんの姉さんとおばあさんの頭蓋骨ずがいこつが出て来たと、お父さんに言うというて」

と言われた。

葬式の列はとても長かった。山の中を通る訳にはいかず、その時に通った回り道は遠くて、しかも一尺 (約 30cm) 道だから大変だった。祖父の遺体を入れた棺桶かんおけの前を父の弟の槌造さんが、後を父の従兄の節一さんが、二人で担になって運んだ。その後を親戚や近所の子供を前にして大勢の大人が続いた。

棺桶を墓穴へ納めて、父と大日の実おじさんが二人で、私の姉と祖母の頭蓋骨や他の骸骨を棺桶の中に入れた。それから、実おじさんがおもむろに私を呼んだ。突然呼ばれて私はびっくりした。

「健ちゃんは 5 年生か。大きくなったのう。家の跡取りの孫が、初めの土をかけることになっているんじゃないよ。おっさんが『よっしゃ』と言うきにええな」

それを聞いて、なおびっくりした。多くの人の前で泣き声だけは出すまいと必死で我慢して、おじいさんが入っている棺桶に、スコップで何回も何回も土をかけた。元気だった時のおじいさんの顔が浮かんで来て、目から涙が吹き出てぽたぽたと落ちた。

この経験を私は誰にも話したことはない。同じ経験をしている人は、私の周りに何人もいる筈だが、誰からも聞いたことがない。1 ヶ月後の 8 月 1 日には 86 歳になるのもう期限が切れる、書き残しておかねばと一大決心して、ここまで涙を流しながら認したためた次第である。

おじいさんは元気なうちは、私が学校から帰って来ると、いつも外縁に座って待っていてくれた。亡くなってからは、学校から帰っても、いつも外縁に座って待っていてくれたおじいさんがいない。それで、ああ、おじいさんは亡くなったのだと気付くのだった。そんな日が 1 ヶ月ぐらひは続いたように思う。

父が出征していた間の祖父は、私や母にとっても厳しかった。今考えれば、それも当然であった

と思えてくる。父が出征して2週間後に祖母・ヤスは急逝して、祖父は老いてくるし、跡取りの孫の私は四歳になったばかり。自分の息子二人と娘の夫は出征している。生きて帰って来るとは限らない。祖父は自分がしっかりしなければと思いつつも、何と心細かったことであろうか。今の私の頭の想像力の域を遥かに超えている。

祖母は11月13日に急逝している。祖母の四十九日の法要を終えてであったのだろう。年末に、祖父に連れられて善通寺へ往復歩いてお参りに行った。祖父と並んで、お大師さんに長い間手を合わせた。

「健一は何を頼んだんぞ」

「何ちゃ頼まへん」



「そうか、そうか、それでええんじゃ。お大師さんは今までの日本で一番偉い人やきに、この子には何をしてやらないかんかはちゃんと分かっとるきに。おじいさんと、また一緒にお参りに来んかのう」

80年前のこの祖父の言葉は、今も鮮明に私の頭に残っている。

善通寺へお参りしてから間無し、多分新しい年になっていただろう。とても寒い朝、私が顔を洗おうとしている洗面器に、母がかんず(湯沸かし)から柄杓ひしゃくでそっと湯を足してくれた。丁度そこへ祖父が現れた。

「水で顔を洗え。湯で顔を洗うようではいかん。健一、その水は捨てなさい。マツエ、お前は健一を強い子に育てないかんのぞ。それくらい分かっとるじゃろが」

と、私と母は叱責された。以来私は今に至るまで湯で顔を洗ったことはない。

昭和21(1946)年7月20日、父が生きて帰って来た。国民学校1年生の1学期の終業式の日だったからよく憶えている。その日以後、亡くなるまでの4年3ヶ月余り、私は祖父に一度も叱られたことがない。人が変わったように優しくなった。

農作業も父に任せてしなくなった。していたのは、田植え時期の苗代での苗取りぐらいだった。専ら任されていたのは、昭和22(1947)年12月生まれの弟・英明の子守だった。いつも外縁で横になって子守をしていた。弟が這うようになっても見ているだけだった。私が丁度小学校から帰って来た時、弟が外縁から下へ落ちた。

私は叫んだ。

「おじいさん、ちゃんと見よらんと危ないやん」

おじいさんは私には何も答えず、外縁の上から横になったまま、落ちた英明をじっと見ている。弟・英明も不思議なことに泣いたりしない。おじいさんは徐に私に言い聞かせるように言った。

「この位の高さから落ちて怪我するようではいかん。英明は、今のは自分で落ちたんぞ。だから、怪我はしていない。強い子に育つぞ」

弟は下で、泥まみれになって地べたを這い回っている。これが、おじいさんの子守かと私は納得したのだった。母も子守を頼んでいる手前、何も言えなかったのだろう。

祖父が亡くなって1ヶ月半後に下の弟・文俊が生まれた。文俊は祖父を知らない。

(令和7年7月1日)